

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。

吾輩はここで始めて人間というのを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番一籥悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。

しかしその当時は何という考もなかったから別段恐しいとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。

掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始であろう。

この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている。第一毛をもって裝飾されべきは顔がつつるつるしてまるで葉缶だ。その後猫にもだいが逢つたがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと煙を吹く。どうも咽せぼくて実に弱つた。

これが人間の飲む煙草というものである事はようやくこの頃知つた。

この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つておつたが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。

書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。

到底助からなと思つていると、どざりと音がして眼から

火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおつた兄弟が一一疋も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまつた。

その上今までの所とは違つて無暗に明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも容子がおかしいと、のそのそ這い出して見ると非常に痛い。

吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよからうと考えて見た。別にこれという分別も出ない。

しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考へ付いた。ニャー、ニャーと試みにやつて見たが誰も来ない。

そのうち池の上をさらさらと風が渡つて日が暮れかかる。腹が非常に減つて来た。泣きたくても声が出ない。

仕方がない、何でもよいから食物のある所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左りに廻り始めた。

どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這つて行くとうやうやくの事で何となく人間臭い所へ出た。

ここへ這入つたら、どうにかなると思つて竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れんのである。

一樹の蔭とはよく云つたものだ。この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になつてゐる。

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。

吾輩はここで始めて人間というのを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番一擲悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。

しかしその当時は何という考もなかったから別段恐しいとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。

掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始であろう。

この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている。第一毛をもつて裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで葉缶だ。その後猫にもだいぶ逢つたがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと煙を吹く。どうも咽せぼくて実に弱つた。

これが人間の飲む煙草というものである事はようやくこの頃知つた。

この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つておつたが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。

書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。

到底助からなと思つてみると、どざりと音がして眼から

火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおつた兄弟が一一疋も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまつた。

その上今までの所とは違つて無暗に明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも容子がおかしいと、のそのそ這い出して見ると非常に痛い。

吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよからうと考へて見た。別にこれという分別も出ない。

しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考へ付いた。ニャー、ニャーと試みにやつて見たが誰も来ない。

そのうち池の上をさらさらと風が渡つて日が暮れかかる。腹が非常に減つて来た。泣きたくても声が出ない。

仕方がない、何でもよいから食物のある所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左りに廻り始めた。

どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這つて行くとうようやくの事で何となく人間臭い所へ出た。

ここへ這入つたら、どうにかなると思つて竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れのである。

一樹の蔭とはよく云つたものだ。この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になつてゐる。